

博士学位請求論文

要旨

保育者の保育行為スタイルの
生成・維持プロセスに関する研究

上 田 敏 丈

(D115159)

広島大学大学院教育学研究科

I. 論文題目

保育者の保育行為スタイルの生成・維持に関する研究

II. 論文構成

序章 研究の背景と目的

- 第1節 本研究の背景
- 第2節 保育行為スタイルの先行研究の検討
- 第3節 本研究の目的
- 第4節 本研究の意義

第1章 保育行為スタイル研究における概念整理

- 第1節 保育行為スタイルの定義をめぐる整理
- 第2節 保育行為スタイルの分類に関する整理
- 第3節 保育行為スタイルの適用
- 第4節 これまでの保育行為スタイル研究の限界

第2章 理論及び研究方法論

- 第1節 本研究の依拠する理論
 - 第1項 本理論に基づく理由
 - 第2項 ヴァルシナーの文化心理学
 - 第3項 発生の三層モデル
 - 第4項 内化／外化プロセス
- 第2節 研究方法論としての複線径路・等至性モデル
- 第3節 保育の文脈における適用

第3章 保育行為スタイルの特徴

- 第1節 本章の目的
- 第2節 保育行為スタイルの分類とかかわりの諸相
 - 第1項 方法
 - 第2項 指導的保育行為スタイル
 - 第3項 集団的保育行為スタイル
 - 第4項 応答的保育行為スタイル
- 第3節 類似場面における保育行為スタイル間の差異
 - 第1項 方法
 - 第2項 選べない選択肢と選べる選択肢（お片付け場面）
 - 第3項 できる喜びと見つける喜び（制作活動場面）
 - 第4項 仲間文化外での和解と仲間文化内での和解（いざこざ場面）
- 第4節 小括

第4章 保育行為スタイルの内化／外化プロセス

第1節 本章の目的

第2節 方法

第1項 研究協力者

第2項 分析方法

第3項 いざこざ場面に対する分析について

第4項 集団活動場面に対する分析について

第3節 いざこざ場面における検討

第1項 TLMGに基づく保育行為スタイル

第2項 層1：内化プロセス

第3項 層2：保育行為スタイルの分岐点

第4項 層3：主観的意味としての価値観

第5項 層1：外化プロセス

第4節 集団遊び場面における検討

第1項 TLMGによる図式化

第2項 集団活動場面での内化プロセス

第3項 集団活動場面での外化プロセス

第4項 いざこざ場面との比較検討

第5節 小括

第5章 保育行為スタイルの萌芽としての価値観と行為の関係

第1節 本章の目的

第1項 問題背景

第2項 目的

第2節 方法

第1項 本章の研究協力者

第2項 インタビューについて

第3項 分析方法

第3節 結果

第1項 とまどい期

第2項 試行錯誤期

第3項 1年目の達成期

第4節 保育行為スタイルの萌芽としての行為と価値観の結び付き

第5節 小括

第6章 主体的選択としての保育行為スタイル

第1節 本章の目的

第2節 方法

第1項 本章の研究協力園・協力者

第2項 観察方法について

第3項 カンファレンスについて

第4項 分析方法について

第3節 カンファレンスにおけるふりかえりプロセス

第1項 ふりかえりプロセス

第4節 「変わらない」変化としての保育行為スタイル

第1項 ふりかえりからみる保育行為スタイル

第2項 「変わらない」ことを選択し続けている変化としての

保育行為スタイル

第3項 保育行為スタイルの差異

第5節 小括

終章 総合考察

第1節 前章までの要約

第2節 保育行為スタイルへのインプリケーション

第1項 TLMGに基づく保育行為スタイルのモデル

第2項 初任保育者に対するインプリケーション

第3節 本研究による保育研修への提言

第1項 行為（最下層）に着目した改善型研修

第2項 記号（中間層）に着目したゆらぎ共有型研修

第3項 価値観（最上層）に着目した薫陶型研修

第4節 保育者研究への意義

第5節 本研究の限界と課題

引用文献

謝辞

Ⅲ. 論文要旨

序章 研究の背景と目的

研究の背景と先行研究の検討

保育者の専門性に関する研究の一つとして、保育行為を検討していくことはこれまで様々な視点で取り上げられてきた（例えば、梶田ら，1988；高濱，2000 など）。これらの研究では、保育経験の長い保育者ほど、それぞれの保育の場面に適した適切な指導やかかわりを行うことができるようになることが示されている。一方で、保育者の指導やかかわりの多様性を捉えようとしたものがある。これらを計量的に捉えようとした研究としては、保育行為を分類しその頻度を測定しようとしているものがあげられる（例えば、小川ら，1978；田中ら，1988；芦田，1992 など）。その中では保育者によって、使用する保育行為の頻度に偏りが存在していることに言及されている。

このような保育者が保育を行う際の行為の偏りをティーチング・スタイル (teaching style) として、これまでの保育者研究の中で知見が蓄積されてきている（例えば、Louiser, 1994；Mohanna, 2008 など）。ティーチング・スタイルとは、「指導における個々人のアプローチの特性」（Hayers, 1999）と定義されるが、類似の用語として、Personal Teacher Theory（梶田ら，1985）、Teacher styles（Mahoney, 1999）などがあげられる。ここでは「保育行為スタイル」と統一的使用する¹。

保育行為スタイルに関する研究として、第一に保育行為スタイルにはどのようなものがあるのかを主として計量的手法によって明らかにしてきたもの（Kruifら，2000；関口ら，1985；渡辺，1979；上田，2008 など）、第二に、保育行為スタイルに影響を与える保育者の要因についての研究である。ここには保育行為スタイルに影響を与えるものとしての保育者の持つ価値観との関連を明らかにしたもの（仲井ら，2003；笠原，1997 など）があげられる。このような先行研究の知見をまとめると、保育経験の長い保育者になるほど、適切な指導やかかわりの知識が増え、場面に応じた行為が選択できるようになるが、一方で、保育経験の長い保育者になるほど、同じような場面では同じようなかかわりを行うようになるという（中井，2003）、保育行為に着目すると、相反するような知見がこれまで蓄積されてきている。このような相反する知見が生じている原因として以下のことが考えられる。

第一に、行為の頻度としてスタイルを捉えていることである。従来の研究では、観察やアンケートによって計量的に測定された行為から分類されたものが主である。だが、同じような行為であったとしても、初任者とベテランでは異なる理由から行っているのかもしれない。あるいはベテラン保育者は、ある場面に対する適切なかかわりがわかりきっているからこそ、かかわりの選択肢が少ないのかもしれない。従って、行為だけではなく、その行為を裏付けている行為の意味を研究の射程とする必要がある。

第二に、保育行為スタイルを固定的なものとして捉えていることである。上述したように、計量的研究が中心であった従来の研究において、保育行為スタイルは改善していく必要のあるものと捉えられてきた。例えば、中井（2005）は保育者の価値観と保育行為スタイルとの関係を明らかにした上で、これが新たな知識や指導論を組み入れる際の阻害要因となると述べている。だが、保育行為スタイルとは保育者がこれまでの保育経験の蓄積の中で、自らの価値観と日々の保育行為とを結びつけ生成し

¹保育行為スタイルという用語に統一したのは、次の理由による。teacher や teaching は保育者の直接的な指導を喚起させるため、見守る、待つといった日本の保育者特有のかかわりと齟齬が生じてしまう。また、援助については、子ども理解から実践、反省といった PDCA サイクルまでを含む包括的な概念であるため、本研究では、保育者が幼児に対して行う行為を選択する際の個人特性として、保育行為スタイルという用語を用いている。

たものである。保育者の保育行為スタイルが固定的であることの意味を問う必要がある。

以上のことから、本研究では保育行為スタイルを単に表出された保育行為としてだけではなく、そこに結び付く価値観とともに包括的に捉えることで、保育行為スタイルがどのように生成され、維持されているのかを明らかにしていく。

目的

本研究の目的は、発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis: 以下、TLMG）を手がかりに保育行為と価値観の関係を捉えることで、保育行為スタイルがどのように生成・維持されているのかを明らかにする。具体的には、次のような研究課題を設定した。

第一に、これまでの保育行為スタイルに関する研究をめぐる概念整理と課題について検討する（第1章）。前述したように、保育行為スタイルには、様々な用語が使われ、また、多くのスタイルが言及されている。保育者の保育行為スタイルについての先行研究の蓄積を整理し、80年代以後、これらの研究が行き詰まった要因を明らかにする。また、この課題を乗り越えていくために、本研究では、ヴァルシナーの発生の三層モデルを理論枠組として依拠するが、本理論枠組について整理する（第2章）。

第二に、これまでの先行研究で明らかにされている経験の長い保育者の保育行為スタイルの違いがどのように生成され維持されているのかという点である。まず、保育者の保育行為スタイルにはどのようなものがありどのような特徴があるのかを明らかにし（第3章）、それがなぜ分岐するのか、そこにはどのような保育者の価値観と結び付いているのか、保育場面による違いはどのように影響しているのかを明らかにする（第4章）。

第三に、保育行為スタイルを所有する保育者は、それまでの保育経験の中で、何らかの経験が価値観に結び付き、保育行為スタイルを生成していると考えられる。よって、保育行為スタイルが成立する萌芽として、日常の保育行為がどのような形で価値観に影響していくのかを特にその行為から価値観への影響が多いと考えられる初任保育者を対象に明らかにしていく（第5章）。

第四に、保育行為スタイルが固定的であることの意味を明らかにしていく。そのためにふりかえりに基づき、保育者の保育の改善を目指して行われる保育カンファレンスを通して、保育者が自らの保育行為スタイルをどのように捉えているのかを明らかにしていく（第6章）。

以上を踏まえて、発生の三層モデルに基づき保育行為スタイルを分析した結果から、本研究が与える知見と保育者研究に対する寄与についてまとめる（終章）。

第1章 保育行為スタイル研究における概念整理

第1章では、保育行為スタイルに関する概念の整理を行う。保育行為スタイル研究はティーチング・スタイル研究の流れを組むが、これまでの先行研究において、ティーチング・スタイルとは何を示しているのかが曖昧なまま研究されてきている。大きくは次の2つがティーチング・スタイル研究の課題である。

ひとつはティーチング・スタイルの定義の曖昧さである。Bennet (1976) や Hayers (1989)、Pajak(2003)など、それぞれの定義づけには、若干の違いがあるものの、個々の教師が無意識的に持っている教授行動のパターンであるといえよう。ただし、これらの定義は、個々人の特性としてティーチング・スタイルを扱っているが、単に指導方法を言い換えているものから、個人と分離不可能なパーソナリティとしてまで広く含めたものとなっており、研究者によって取り扱いが異なっているという課題がある。

次に、柔軟性をめぐる曖昧さである。研究の初期から、ティーチング・スタイルには、「現存する専門的知識」「勤務校の学習哲学」「個人の性格」「生徒のニーズ」といった様々な要素が複合的に影響して表出されているもの (Bennet, 1976) であり、柔軟に対応できるかどうかは、その個人によるとされる (スターンバーグ, 2000)。

これらの小学校以上の教師を対象としたティーチング・スタイル研究が持つ曖昧さは、保育者を対象とした保育行為スタイル研究にも当てはまる。つまり、これまでの保育行為スタイルやティーチング・スタイルの概念の課題は、パーソナリティとしての価値観と取り替え可能な指導方法という2つのレベルで混在したまま取り扱われていることにある。

そこで、本研究ではこれらの概念を整理し、分析の俎上にのせるために、ヴァルシナーの発生の三層モデル (TLMG) を利用する (Valsiner, 2007)。

第2章 理論的枠組

第2章では、保育者の保育行為を裏付けている行為の意味を捉え、それが固定的であることの意味をどのように明確にするために用いるヴァルシナーの TLMG について述べる。

TLMG は、価値観と日常行為との間に、両者を結びつけ、変容していく何らかの影響を与える中間層を設定した理論モデルである。本理論に基づけば、固定的に見える行為と保育者の持つ価値観との間に、両者を媒介する記号としての中間層を設定できる。

これにより、保育者が日々の保育行為を選択するプロセスを考えると、以下のように捉えることができる。まず、最下層としては、日々生起する幼児の活動、それに対する保育者のアクションといった、日常的な保育行為として捉えることができる。次に中間層は記号発生のレベルであり、日常の様々な幼児の状況から、保育者は必要な情報を取捨選択し、そこで体系化された記号が保育者自身の価値観と結び付き、再び行為へと戻っていく。最上層は価値観のレベルであり、保育者は目の前の幼児がどのように育て欲しいのか、また、幼児の活動はどういう意味を持つものなのかを価値観として形成し所有しているものとして捉えていく。

本理論に依拠することで、ある種の価値観を持った保育者がどのように保育行為を選択しているのかという行為の意味と捉えることができると考えるため、本モデルを適用した。

第3章 保育行為スタイルの特徴

第3章では、保育行為スタイルの特徴を明らかにするために、1) 保育行為スタイルを分類し、2) 類似した場面で異なる保育行為スタイルの保育者のかかわりの差異はどのようなものかという2点を検討する。

1) 保育行為スタイルの分類とかかわりの諸相

調査対象は、7園7名である。また、保育行為スタイルは、一定の年数以上の保育経験の蓄積によって、分岐していくと考えられるため (上田, 2008)、本研究では保育経験10年以上の保育士のみを対象とした。調査期間は、2011年11月から2012年11月までである。

承諾を得た保育士7名に対して、任意の日程で、協力者の園へ筆者が1~2回観察に行き、ビデオカメラで保育場面を録画した。後日、可能な限り早い段階で (1週間以内程度)、録画した映像を協力者と共に視聴し、それぞれの場面ごとにその状況やその時々声かけや保育行為の意図について、半構造化インタビューを行った (各60-90分程度)。

7名の保育士に対するインタビューの語りから、実際に幼児とかかわったことを現す動詞を拾い上げ

分類した。結果として、上田（2008）を参考にし、A・B保育士を指導的保育行為スタイル、C・D保育士を集团的保育行為スタイル、E・F・G保育士を応答的保育行為スタイルの保育者とした。

指導的保育行為スタイルの保育者は、「確認する」「制止する」「ルールを守るように言う」といったかかわりを行っており、集团的保育行為スタイルの保育者は、「相談して決めるよういう」「自分の意見を促す」といったかかわりを行っていた。また、応答的保育行為スタイルの保育者は、「再度考えるようにいう」「遊びを盛り上げる」といったかかわりを行う。集団での活動を大事にしつつも、重要だと考えているのは、その中での一人一人の充実や力の発揮である。

2) 類似場面における保育行為スタイル間の差異

研究協力者はX幼稚園教諭（女性・42歳）とY幼稚園教諭（男性・32歳）であり、期間は、2005年10月から2006年3月までである。

観察から、集団活動場面、好きな遊び場面、いざこざ場面の3場面において、それぞれ2人の教諭のかかわりが異なることが明らかになった（上田，2010）。例えば、お片付け場面において、2人とも幼児に「お片付けできる」かどうかの問いかけを行っているのだが、X教諭は選択肢を提示しつつ巧みにひとつを選ぶように方向付けるのにたいして、Y教諭はする／しないを選択できる問いかけであった。同じように、制作活動場面においては、X教諭は出来る喜びを、Y教諭はみつける喜びを意図したかかわりを行い、いざこざ場面においては、X教諭は両成敗の仲間文化外での仲裁の仕方をおこない、Y教諭は遊びの中でいざこざを解決していく仲間文化内の仲裁を行っていた。このように類似した場面であっても、保育行為の違いが保育行為の差異として現れており、これは2人の教育的意図の違いによって形成されているといえる。

第4章 保育行為スタイルの内化／外化プロセス

第4章では以下の手順で保育行為スタイルの内化／外化プロセスを明らかにした。ここで述べる内化プロセスとは、外的な情報を内的に統合するプロセスであり、外化プロセスはその統合形態として外的な環境を変更していくことである（ヴァルシナー，2013）。分析には、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を最初に用い、保育者の語りから、象徴的な概念を取り出し、そこで得られた概念をTEMによって分析し、発生の三層モデルに沿って、活動におけるかかわりのプロセスを明らかにするという2段階で行った。分析対象としたのは、いざこざ場面と集団活動場面である。

いざこざ場面における検討からは、保育行為スタイルが生成されるプロセスとして、「身体攻撃」「雰囲気」「幼児の自己解決」など、保育者が着目するポイントは類似しているものの、そこへの意味づけが異なっていることが示された。これはTLMGにおける外的な情報を内的に統合していくプロセスである内化であり、外的な情報を統合する中間層の違いが保育行為スタイルの差異を生み出していることが明らかになった。同時に、様々な場面に対して柔軟に対応できることは、TLMGにおける日常行為レベルにおける対応であり、これは外化プロセスにおける社会的文脈との葛藤にすぎず、結果として自身の保育行為スタイルには変容を及ぼさないことが明らかとなった。

また、集団活動場面の内化／外化プロセスにおいて、共通する価値観として「ゆっくり」とした「長期的展望」が中心であった。その差異を形成するものとして集団の中でひとり一人をどう発揮させるのかという集団内個性に着目するのか、幼児集団全体としてどうひとり一人があるべきかという個別的集団性に着目するのかという点で、保育者の意図が葛藤していることが明らかになった。

以上のことから、保育行為スタイルの差異を生成するのは、内化プロセスにおける記号であり、経

験の長い保育者はある一定の価値観を持っていることから、結果として保育行為がスタイルとして分岐していく。一方で、経験の長い保育者はその状況に応じてどのようにかかわればよいのかを想定することができる。しかし、状況に応じた適切なかかわりは、外化プロセスにおける社会的文脈との葛藤であり、保育者自身の価値観とは葛藤しない。従って、経験の長い保育者は保育行為スタイルを持ちつつ、状況に応じた適切なかかわりができるようになるのである。

第5章 保育行為スタイルの萌芽としての価値観と行為の関係

第5章では、このような保育行為スタイルが生成される端緒として、保育者が保育の中でどのように行為と価値観とを結びつけていくのか、日常の行為における価値観の変容を明らかにする。そのために、特に保育経験が価値観に大きく影響を与えると考えられる初任保育者を対象とした（例えば、足立，2010 など）。

研究協力者は、公立保育園で5歳児クラスを担当しているサトミ先生（女性・調査時23歳）である。1年目の6月から3月まで月に1回（計10回）、半構造化インタビューを行った。

サトミ先生の1年は、ベテラン保育士に依存し「何もできていない」観であったとまどい期（4-6月）を始まりとして、自分なりに試行錯誤し、様々な環境構成やいざごへの仲裁方法を試し、「なんとかしないと私」観の試行錯誤期（7-11月）を経て、幼児集団をまとめていくこと、いざごを少なくさせること、行事のつつがなく終了させることという課題を持ちつつ、徐々にそれができるようになった「保育できた」観を形成した達成期（12-3月）という3期に分けることができた。

TLMGに基づくと、サトミ先生は日々の行為によって生起する様々な成功や失敗を通じた試行錯誤し、葛藤を感じている。だが、この全てがサトミ先生の価値観を変容させるわけではない。サトミ先生の感じる試行錯誤や葛藤は、中間層において様々な記号を生成し、自身の価値観や行為に影響を与えつつ、大きく揺らいでいる。幾度となく揺らぎながら、自身の保育行為の適切解を探索し、同時に自身の価値観にも影響を与え、徐々に価値観の変容へと結び付いていく過程が明らかになった（上田，2014a）。この中間層によるゆらぎの繰り返しは、価値観を変容させていること、試行錯誤しながら適切解としての保育行為を探索していくことが、保育行為スタイル形成の萌芽であると考えられよう。

第6章 主体的選択としての保育行為スタイル

次に、一度生成された保育者の保育行為スタイルが、日々の保育の中で変容しているのかに焦点を当てる。第6章では、2名の幼稚園教諭を対象として保育観察とカンファレンスを通して、保育行為スタイルの変容・非変容について明らかにする。

研究協力者は第3章の2）と同じである。カンファレンスにおける二人の保育者の語りから、記録の視聴、状況の確認、行為の評価、課題の発見、展開可能性という保育行為のふりかえりプロセスを明らかにした（上田，2011）。このふりかえりプロセスの中では様々なシミュレーションが行われるものの最終的には展望がなかなか見込めないこと、自身の価値観とあわないことから、保育行為スタイルは維持されていた。このような保育行為スタイルが変わらないことは、全く変わらないことを意味しているのではない。本章では、様々なゆらぎを経験しながら、最終的に変わらないことを選択していることが明らかになった。言い換えるならば、「変わらない」ことを選択し、維持し続けている変化である。

従って、保育行為スタイルとは、一度、形成されれば固定的なものとして捉えられるものではなく、実際には主体的に「変わらない」ことを選択し続けている変化であるといえよう。

終章 総合考察

以上述べてきた知見から、次のようなインプリケーションが得られる。

まず、TLMGに基づくことで、従来の研究では保育行為頻度の偏りであった保育行為スタイルが、保育者の価値観と保育行為とが不可分に結び付いたものとして捉えられたことにある。本研究では、これをマリモ・モデルとして、モデル提示を行った。このように捉えると、保育者の価値観に裏付けされた保育行為とは、単純に代替可能な技術ではなく、保育行為スタイルを形成すること自体が、個々の保育者としてのアイデンティティであり、専門性であるといえる。そして、このような保育行為スタイルを形成していくためには、特に初任保育者の時期が重要であると考えられる。

これらを踏まえて、三層モデルそれぞれの層に着目した研修の型（改善型、ゆらぎ共有型、薫陶型）を提言することができた。

本研究の意義は次の通りである。

第一に、本研究では、経験の長い保育者が保育行為スタイルを獲得しつつも、様々な状況に柔軟に対応できることへの統合的解釈を行ったことである。行為だけではなく、行為の意味を射程に含めて保育行為スタイルが生成されるプロセスを示すことで、単に行為を評価するのではない異なる視点を与えることができた。

第二に、保育行為スタイルの維持が変化しない停滞としてではなく、主体的に選択されるという転換を示したことである。保育経験の長い保育者の保育行為が保育行為スタイルとして表出されていることは、試行錯誤や葛藤を通して変わらないことを選択しているのであり、単に同じ日常を同じように過ごしているのではない。「変わらない」ではなく、「変わらない」ことの背後には、様々な試行錯誤や葛藤といったゆらぎが存在している。保育経験の長い保育者にとって、このゆらぎを通して「変わらない」でいる維持こそが、保育者自身の専門性であり、アイデンティティとなっている。

第三に、反省を強調したカンファレンスに対する示唆である。反省的実践家モデル(ショーン, 2001)から、カンファレンスや研修会で批判的に保育者の保育行為を捉えることがある。しかしショーンの述べる反省的実践家とは、単純にそこで代替可能な技術としての保育行為の手立てを導き出すことではなく、自身の行為がどのような意味づけのもとで生成されているのかという価値観までも含めた問い直しにこそ、その意味があるのであろう(ショーン, 2001)。この点において、本研究で示した保育行為スタイルの生成と維持の可視化は、ふりかえりを行う上での重要な示唆を与えると考えられる。

第四に、保育行為スタイルの生成に対する初任保育者の時期の重要性を示したことである。特に即戦力としての育成ではなく、初任保育者がどのような保育者としての経験を蓄積していくのが重要であることが示唆される。

最後に、本研究の限界と課題について述べておく。

本研究では、保育行為スタイルを保育者の主体的なものとして肯定的に捉えているが、否定的な意味で変わらない保育行為スタイルの保育者も存在すると考えられるが、本研究では視野に入れることができていない。また、保育行為スタイルが幼児に対してどのように影響を与えていくのか、初任保育者の後、2～5年の経験の保育者がどのようにして異なる保育行為スタイルを生成する価値観を獲得していくのかについては十分に明らかにできていない。これらの点が本研究の限界であり、今後の課題となる。

引用文献

- 秋田喜代美 (2000) 保育者の成長と専門性. 発達. 83. 1-74.
- 赤塚徳郎・森林・石橋千種・福井敏雄 (1981) 保育者の行動特性と幼児の集団行動との関連. 広島大学教育学部紀要(1). 30. 143-152.
- 赤塚徳郎・森林・大元千種 (1982) 保育行動と幼児の活動特性の保育形態別考察. 広島大学教育学部紀要 (1). 31. 133-144.
- 芦田宏 (1992) 保育行動のカテゴリー分析. 姫路短期大学研究報告紀要. 37. 39-47.
- Benesse 教育研究開発センター (2006) 「学校力」を生み出す学校評価. View. 21. Benesse.
- Bennet,N. (1976) *Teaching styles and pupil progress*. Harvard university press.
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保 (1985) 保育者の保育経験と保育観に関する研究. 発達研究 (財) 発達科学研究教育センター紀要. 1. 23-39.
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保 (1986) 保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅱ. 発達研究 (財) 発達科学研究教育センター紀要. 2. 17-47.
- 藤崎真知代 (1987) 自由保育における保育者と幼児とのかかわり-縦断研究による保育効果の分析 - 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編. 36. 363-383.
- Hayes, E. (1989) *Effective Teaching Styles*. Jossey-Bass Inc.
- 堀淳世 (1997) 幼稚園教諭が語る指導方法. 保育学研究. 35. 60-67.
- 岩田恵子 (2011) 幼稚園における仲間づくり-「安心」関係から「信頼」関係を気づく道筋の探求-. 保育学研究. 49 (2). 41-51.
- 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子 (1985) 幼児教育専攻学生の「個人レベルの指導論」の研究. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科). 31. 95-112.
- 梶田正巳・杉村伸一郎・桐山雅子・後藤宗理・吉田直子 (1988) 具体的な事例へ保育者はどう対応しているか. 名古屋大学教育学部 (教育心理学). 35. 111-136.
- 笠原正洋・藤井直子 (1997) 保育者の信念と子どもへの関わり行動との関連. 中村学園研究紀要. 29. 9-16.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. 厚生労働省.
- Kruij, R., McWilliam, R.A., Ridley, S.M. & Waley,M.B. (2000) Classification of teachers' interaction behaviors in early childhood classrooms. *Early childhood research Quarterly*. 15. 247-268.
- Louisell,R.D.,& Descamps,J. (1992) *Developing a Teaching Styles: Methods for elementary school teachers*. Waveland Press Inc.
- Mahoney,G. & Wheeden,C.A. (1999) The effect of teacher style on interactive engagement of preschool-aged children with special learning needs. *Early childhood research quarterly*. 14. 51-68.
- 真宮美奈子・川上琴美・赤井住郎 (2004) 保育実践の熟達化に関する考察-経験年数の違いによる保育実践の語りの分析から-. 山梨学院短期大学紀要. 25. 71-76.
- McWilliam,R.A., Scarborough,A.A., Bagby.,J.H. & Sweeney,A.L. (1998) *Teaching style rating scale*. Chapel Hill. Frank Porter Graham Child Development Center University of North Carolina.

- McWilliam,R.A., Zulli,R.A. & de Kruif, R.E.L. (1998) *Teaching style rating scale manual*. Chapel Hill. Frank Porter Graham Child Development Center University of North Carolina.
- Mishra,R.C. (2008) *Teaching styles*. APH publishing corporation.
- 三好敏江・石橋由美 (2006) 初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題. 新見公立短期大学紀要. 27. 111-116.
- 箕浦康子 (1999) フィールドワークの技法と実際. ミネルヴァ書房.
- 箕輪潤子 (2013) 片付けの目標と実態の関連性. 野間研究書紀要. 57. 156-175.
- Mohanna,K., Chambers,R., Wall,D. (2008) *Your Teaching Style: A practical guide to understanding, developing and improving*. Radcliffe publishing Ltd.
- 森楸・大元千種・西田忠男・植田ひとみ (1985) 幼児教育における指導法と保育イデオロギー. 広島大学教育学部紀要(1). 33. 87-96.
- 森楸・植田ひとみ・大元千種・西田忠男・湯川秀樹 (1986a) 保育者の指導意識の比較 —経験・意欲・指導タイプ別考察—. 幼年教育研究年報. 11. 13-23.
- 森楸・大元千種・植田ひとみ・西田忠男 (1986b) 保育学生の Belief System. 広島大学教育学部紀要(1). 34. 153-163.
- 森楸・七木田敦・青井倫子・廿日出里美 (1991) 行事場面における保育行動の特性. 広島大学教育学部紀要 (1). 40. 181-186.
- 森上史朗 (1996) カンファレンスによって保育を開く. 発達. 68. 1-4.
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領. 文部科学省.
- 中井隆司・川下亜紀 (2003) 運動遊び場面における幼稚園教諭の意志決定過程と「個人レベルの指導論」との関係. 教育実践総合センター研究紀要. 12. 1-10.
- 中井隆司・松良綾子 (2005) 保育場面に表出する幼稚園教諭の指導信念に関する事例研究. 教育実践総合センター研究紀要. 14. 11-20.
- 西山修・片山美香 (2013) 初任初期における保育者支援プログラムの個別実施とその効果. 岡山大学大学院教育学研究科集録. 152. 1-9.
- 小田豊・中坪史典 (2009) 幼児理解からはじまる保育・幼児教育方法. 建帛社.
- 小川博久 (2000) 保育援助論. 生活ジャーナル.
- 小川博久・山本三重子・間宮由美子・小笠原善康・見村木綿子・沢田和子・鎗木典子・鈴木由紀子・望月操・福島真由美・池田由紀子・赤石元子・圓山真理子 (1978) 保育行動分析 —授業研究の方法論の確立のために—. 東京学芸大学紀要 1 部門. 29. 58-78.
- 小原敏郎・入江礼子・白石敏行・友定啓子 (2008) 子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているのか. 乳幼児教育学研究. 17. 93-103.
- 大谷尚 (2007) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 52. 2. 27-44.
- 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization. 感性工学会誌.10.3. 155-160.
- Pajak,E. (2003) *Honoring diverse teaching styles*. ASCD.
- Plank, S. (2000) *Finding one's place*. Teachers college press.
- サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房.
- 佐藤智恵・森本玲子 (2014) 保育者をめざす学生が集団活動時に感じる困難さに関する研究：ナラテ

- イブ・アプローチによる分析. 福祉臨床学科紀要. 11. 57-63.
- 関口準・橋本真理子・後藤千鶴子・常田奈津子・二階堂邦子 (1985) 保育者の保育指導の分析, 評価の研究 I—保育実践の言語分析, 行動分析—. 日本女子体育大学. 15. 147-154.
- 関口準・橋本真理子・後藤千鶴子・常田奈津子・二階堂邦子 (1986) 保育者の保育指導の分析, 評価の研究 II—保育実践の言語分析, 活動分析から—. 日本女子体育大学. 16. 131-138.
- シヨーン.D. (2001) 専門家の知恵. ゆみる出版.
- スターンバーグ.R.J. (2000) 思考スタイル. 新曜社.
- 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991) 子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theory の実証的研究—. 教育心理学研究. 39. 31-39.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克美 (2009) 保育者の語りにみる実践知—「片付け場面」の映像に対する語りの内容分析—. 保育学研究. 47 (2). 70-81.
- 高濱裕子 (2000) 保育者としての成長プロセス. 風間書房.
- 田中敏明・渡邊尚子 (1988) 幼稚園における保育者の保育行動評価の試み. 福岡教育大学紀要 38. 4. 249-262.
- 竹内範子・上野由利子・前田喜四雄・玉村公二彦・越野和之 (2009) 特別な配慮を必要とする幼児の教育的支援. 教育実践総合センター研究紀要. 18. 157-163.
- 豊田秀樹・秋田喜代美・吉田寿夫・無藤隆 (2011) 質的研究の理論的サンプリングにおける理論的飽和度. 日本教育心理学会第 53 回総会自主企画 25-J-01. 配付資料.
- 豊田和子・榊原菜々枝 (2013) 保育者が語る「幼児理解」に関する傾聴を主とした実践的研究の試み. 桜花学園大学保育学部研究紀要. 11. 63-81.
- 上田敏丈 (2008) 保育者のティーチング・スタイル分類に関する研究. 国際幼児教育学研究. 15. 1-12.
- 上田敏丈 (2010) ティーチング・スタイルを視点とした保育者の関わりについての研究. 子ども社会研究. 16. 3-15.
- 上田敏丈 (2011) 保育援助に対する幼稚園教諭のふりかえりプロセス—異なるティーチング・スタイルに着目して—. 乳幼児教育学研究. 20. 47-58.
- 上田敏丈 (2013) 保育者のいざこざ場面に対するかかわりに関する研究—発生の三層モデルに基づく保育行為スタイルに着目して—. 乳幼児教育学研究. 22. 19-29.
- 上田敏丈 (2014a) 初任保育士のサトミ先生はどのようにして「保育できた」観を獲得したのか?—保育行為スタイルと価値観に着目して—. 保育学研究. 88-98.
- 上田敏丈 (2014b) 保育者の保育行為スタイルと集団活動場面におけるかかわりに関する研究. 教育学研究ジャーナル. 15. 1-9.
- Vander V. K. (1988) Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. B.Spodek, O.N.Saracho & D.Peters(Eds) *Professionalism and the early childhood practitioner*. Teacher College Press. 137-160.
- Valsiner, J. & Sato, T. (2006) Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? . Straub, J., Weidemann, D. Kolbl, C. & Zielke, B. (Eds.) *Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology* Bielefeld: Transcript Verlag. 215-251.
- ヴァルシナー, ヤーン (2013) サトウタツヤ他 (訳) 新しい文化心理学の構築. 新曜社. (Valsiner, J.

(2007) *Culture in mind societies: foundations of cultural psychology*. The Sage Team.)

渡辺恵子 (1979) 積木分類課題におけるティーチング・スタイル：日米の母親と教師の比較. 神奈川大学人文研究. 72. 29-56.

渡辺恵子 (1981) 積木分類課題におけるティーチング・スタイル —その2：事例研究. 神奈川大学人文研究. 78. 1-31.

安田裕子・サトウタツヤ (2012) TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開—.誠信書房.

横山真貴子・秋田喜代美 (2001) 保育における読み聞かせはどのように熟達するのか(2). 人間文化論叢. 4. 59-73.

全国保育士養成協議会 (2009) 保育士養成資料集 50 指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅰ. 全国保育士養成協議会.

全国保育士養成協議会 (2010) 保育士養成資料集 52 指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅱ. 全国保育士養成協議会.